

両沼地方稲作情報 第1号

令和8年2月5日

【8年産米対策】

JA会津よつば 各営農経済センター、(有)カネダイ、(有)猪俣徳一商店、(有)山一米穀店、
会津宮川土地改良区、阿賀川土地改良区、会津坂下町只見川土地改良区、袋原土地改良区

発行：福島県会津農林事務所会津坂下農業普及所（電話0242-83-2113）

〃

金山普及所

（電話0241-54-2801）

↑ 会津坂下農業普及所のホームページで情報を発信しておりますのでご活用ください。

7年産米は5、6年産米と同様に猛暑（記録的な高温）で、少雨（干ばつ）下の生育となりました。また、土壌還元や藻類・表層剥離、倒伏も多く、圃場でみられました。基本技術を再確認して天候に左右されない丈夫なイネづくり、高品質良食味生産を目指しましょう。

■ 土づくり・施肥

有機物の施用（表1）

- ・稲わらや堆肥、緑肥等の有機物を積極的に活用して地力を高めましょう。
- ・地力が高いと土壌の保肥力が高まり、登熟期の肥切れによる品質低下が抑えられます。また、肥料分を補完する効果もあります。
- ・稲わらを春にすき込む場合は、早い時期に分解促進剤や土改材を施用してすき込み腐熟を促しましょう。

表1 稲わら、稲わら堆肥、家畜ふん堆肥の特徴

稲わら	効 果	・地力維持効果は比較的大きい。 ・連用すると窒素代替効果も認められるが、その効果は小さい。
	留意点	・施用開始当初は、窒素肥料の取り込みなどによる悪影響がでやすい。 ・水田に散布された後、翌春の入水までに土中たい肥化が進まないと、土壌還元や窒素肥料の取り込みなどによる悪影響がでやすくなる。 ・したがって、稲わらの分解を促進する土壌改良資材とともに、稲刈り後なるべく早く土中に鋤込む。
稲わら堆肥	効 果	・1t/10a程度の施用では、地力維持効果は稲わらと同等である。 ・窒素肥料代替効果は、施用当初から認められ、稲わらよりやや大きい。
	留意点	・たい肥の腐熟程度や添加資材の違いによって肥効が異なるので注意する。
家畜ふん堆肥	効 果	・地力維持効果は牛ふん堆肥では大きく、発酵鶏ふんで小さい。 ・窒素肥料代替効果は、発酵鶏ふんや豚ふん堆肥で大きく、牛ふん堆肥では稲わら堆肥よりやや大きい程度である。
	留意点	・畜種や副資材の種類及び腐熟程度等によって肥効が大きく異なるので注意する。 ・オガクズ混入堆肥では十分な熟成期間が必要となり、未熟堆肥では窒素肥料の取り込みやオガクズに含まれる有害物質による障害発生への恐れがある。

注 福島県施肥基準より

土壌改良材の施用

ケイ酸資材 ケイ酸は稲体を丈夫にし病虫害抵抗性、耐倒伏性、光合成効率、根の活力を高める大切な成分で、高温時に蒸散を促し品質食味を向上する効果もあります。

・ケイ酸は灌漑水や稲わらから供給されますが、稲体の吸収や浸透水による流亡が多いため（表2）、補う必要があります。その土壌改良目標値は15mg/乾土100g以上で基肥で施用しますが、生育後半に多量に吸収されるため、中干し前頃の施用（追肥）も効果があります。

含鉄資材 毎年、土壌還元（ガス湧き）圃場がみられます。こうした圃場では含鉄資材を施用すると、過度な土壌還元（酸欠状態）が改善され根腐れが抑えられます。また、秋落ち防止に有効で土壌中の鉄分が不足している老朽化水田の改善に有効です。

表2 用途が異なる栽培水田のケイ酸の収支(kg/10a)

	主食用米 500kg	飼料用稲 700kg	イネWCS 500kg
インプット			
灌漑水	30.50	30.50	30.50
肥料	-	-	-
稲わら	70.00	77.00	×
雨水	-	-	-
窒素固定	-	-	-
計	100.50	107.50	30.50
アウトプット			
田面水	-	-	-
浸透水	30.00	30.00	30.00
稲体(粃+わら)	100.00	110.00	110.00
脱窒	-	-	-
計	130.00	140.00	140.00
収支(in-out)	-29.50	-32.50	-109.50

注. 金田:2015 福島県施肥基準抜粋

施肥の施用

- ・高温下では、肥料中の窒素の溶出が早まり、登熟時期に窒素が不足する傾向がみられます。一発肥料を使用している場合でも葉色の褪色が予想される場合は幼穂形成期の生育・栄養診断を行う必要があります。登熟期に肥料切れ（窒素不足）になると、白未熟粒を発生させ品質低下を招きますので葉色に応じた追肥が必要です。なお、登熟時期に葉色が極端に薄い（カラススケールで2.5以下）と、追肥をしても生育が回復しないことがありますので、出穂40日前～幼穂形成期はコシヒカリの場合、葉色をカラススケールで3.0以下にしないよう肥培管理が必要です。

- ・**藻類・表層剥離** 高温により田面水の肥料分（特にリン酸分）が高い圃場では藻類・表層剥離の発生が増加傾向にあり、分げつ抑制や除草剤の効果低下・葉害を招いています。前年に藻類・表層剥離が多発した圃場では落水や薬剤の対応のほか、基肥減肥や側条施肥（肥料を土中に埋め込む）により田面水の肥料濃度を下げる対応も必要です。

■ 水管理

前年は少雨（干ばつ）で、用水路下流域の一部では渇水がみられました。また、除草剤散布や追肥等の用水の必要な時期に不足がみられました。用水のかけ流しは絶対に行わない。地域での水管理の話し合い等、水の有効利用にご協力をお願いします。

飽水管理 中干し以降は自然落水と入水とを繰り返す「飽水（ほうすい）管理」を基本に節水管理をおこないきましょう（図1）。

- ・ ひとひた水状態を保つ「飽水管理」は、気化熱で地温上昇を抑えることができ、高温対策に有効です（図2、夜温の日平均地温の低下）。また、土中への酸素供給を促し土壌還元対策に有効で根の活力が高まります。水位センサーや自動灌水装置の活用で省力的に行えます。

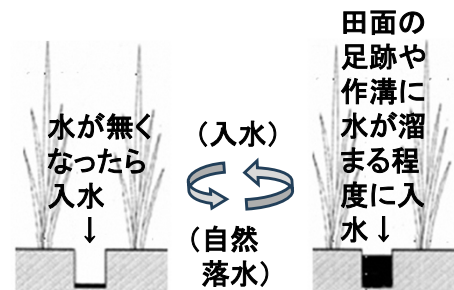


図1 飽水管理

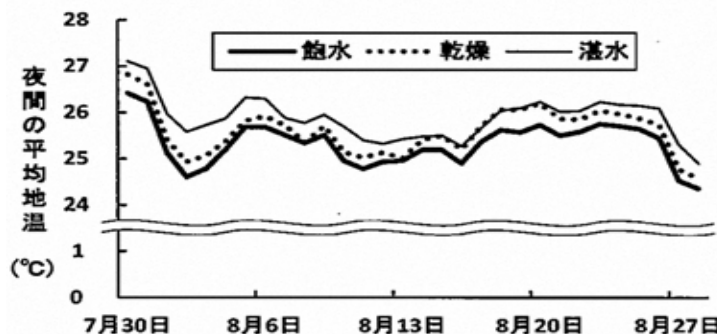


図2 水管理期間中の夜温平均地温の推移
注. 1日のうち0:00～5:50、18:00～23:50の平均値
地温は田面から深さ5cmで測定
(2021～2023年 福島県農業総合センター参考成果)

■ 雑草対策

- ・ ヒエやホタルイ等の取りこぼしや後発雑草による残草が多い圃場がみられます。
- ・ 残草が多かった圃場では、雑草の種子量が多いため、薬剤の体系処理等の対策が必要です。
- ・ 高温により雑草の発生消長が早まっています。散布時期が遅れないよう注意が必要です。また、漏水や田面の均平化を図り後発雑草を抑えましょう。

雑草イネ 他管内では雑草イネの多発により水稻作付を断念する圃場がみられます。当管内でも発生が散見されており、雑草イネの発生を抑えるとともに周囲へ拡散させないよう注意が必要です。対策には右の防除マニュアルを参照してください。



←雑草イネ防除
マニュアル
(福島県農業
総合センタ
ー)

■ 病虫害防除

- ・ 7年産米は、高温により紋枯病の発生が多くみられた一方で、穂いもちの発生も多くみられ、特に山間部の常発地帯では「ずりこみ症状」もみられました。その病虫害の発生状況や特徴、対策の詳細は、右の防除対策を参照してください。



←令和7年度
防除対策
(福島県病害
虫防除所)

斑点米カメムシ類 前年は畦畔での斑点米カメムシ類の発生程度が7月上旬に県全体で平年より高かったため、7月16日付けで県病虫害防除所より注意報が出されました。このため、7年産米の主な落等要因も斑点米カメムシ加害によるもので、割れ粳しやすい品種で加害が多い傾向がみられました。

- ・ 会津地域では、出穂の早い時期から加害する小型カメムシ類のアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、収穫時期まで加害する大型カメムシ類のホソハリカメムシの発生が多くみられ(図3)、加害期間が長く、薬剤防除だけでは防除が難しくなっています。
- ・ 加害が多いと色彩選別機でも除去が難しいケースがみられ、斑点米カメムシ類の発生源となる畦畔や本田内等のイネ科雑草やカヤツリグサ科雑草の除草の徹底が必要です。



上 アカスジカ
スミカメ

左 アカヒゲホ
ソミドリカ
スミカメ

右 ホソハリカ
メムシ

図3 会津地域の主な斑点米カメムシ類

ばか苗病 ばか苗病の発生が増加傾向にあります。ばか苗病の胞子は容易に拡散することが知られていて、感染株から半径500m以内の圃場は感染リスクがあるとされています。発病すると有効な防除方法が無いので、健全種子の使用と種子消毒の徹底により発病させないことが大切です。対策は上記コード（←令和7年度防除対策(福島県病虫害防除所)）より、令和7年4月15日 水稻病虫害防除対策(4月)を参照してください。

「米・食味分析鑑定コンクール国際大会」が令和9年に会津地域を会場に開催されます。

客観的な評価とともにブランド力向上の絶好の機会です。個人・部会で取り組みましょう。